23

“American Journal of Nursing”の記事にみる二〇世紀の日本の看護

大石杉乃

【研究の背景と目的】

一九〇〇年一〇月に創刊された“American Journal of Nursing”（以下、AJN）は、一九一一年から現在までアメリカ看護協会の機関誌となっている。アメリカの看護界が日本および日本の看護をどのように認識していたかを理解するためには日本に関するAJNの記事を分析することが必要と考えられる。

本研究の目的は、日本および日本人に関して書かれたAJNの記事の数と内容を分析し、日本の看護界がアメリカにおいてどのようにとらえられていたかを検討することである。

【方　法】

対象は一九〇〇年一〇月号より二〇〇〇年一二月号までに掲載された日本あるいは日本人に関する記事である。検索方法は、①AJNの「cumulative index」が存在する年はこのindexを用いてキーワードにJapanあるいはJapaneseがある記事を選択し内容を確認した。「cumulative index」のない年は②各巻のcontentおよびindexを用いて日本と関係があると考えられる表題の記事を選びその内容を確認した。

【結　果】

日本および日本人に関する記事は九八件であった。五年単位での数は、一九四六年から一九五〇年が二七件、一九四一年から一九四五年が一二件、一九五一年から一九五五年が一一件の順で、記事が認められなかったのは一九一六年から一九二〇年、一九六一年から一九六五年、一九七一年から一九七五年、一九八六年から一九九〇年、一九九六年から二〇〇〇年であった。

記事の内容は一九〇〇年から一九三二年は日本赤十字社の看護婦の活動、日本の看護の状況、日本の健康問題に関する記事が多かった。日本が国際連盟を脱退した一九三三年から一九四〇年までは聖路加国際病院の活動、

日本の看護の状況の紹介、関東大震災に対するアメリカの援助、日本の医療・看護関係者の訃報があった。日本で看護の指導にあたる看護婦の募集記事が二件あった。一九四一年から一九四五年までは日系人収容所における健康問題や看護に関する記事が多く、日本軍の捕虜となったアメリカ軍看護婦の書いた記事もあった。日本が連合軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領下にあった一九四六年から一九五二年は記事が三二件と最も多い時期であった。日本で働くアメリカ人看護婦の活躍を示す記事が最も多く、その多くは短い記事でニュース欄に掲載されていた。日本の看護改革も紹介されていた。日本で公衆衛生を担当する看護婦と陸軍病院で働く看護婦を募集する記事がGHQから二件あり、日本での活動を希望する看護婦からの問い合わせも一件あった。一九五三年から二〇〇〇年は、日米の看護婦の交流を紹介する記事、日本で行われた国際会議の紹介記事など一七件であった。

AJNの書式は一九九〇年七月から編集方針が変わり、頁数が三段、約一八〇頁より二〜三段、約八八頁と減少、ニュース欄で諸外国の看護を紹介する件数も激減した。

【まとめ】

AJNに掲載された日本および日本人に関する記事九八件を分析した。その結果、太平洋戦争前はアメリカ人教師がいた聖路加国際病院、国外活動を活発に行っていた日本赤十字社など限られた施設の情報が主であった。また神道で開催されたナイチンゲール式典の紹介など、東洋の国日本に興味を示す傾向が認められた。太平洋戦争中はすべてが日系人の問題など対日戦争に関した記事であった。占領期にはアメリカ人看護婦により日本の看護改革が進んでいることを評価した記事が多かった。占領終了後は編集方針の変更もあり、事務的な記事が中心となり記事数も減少したが、日米の看護婦の交流を示す記事も認められた。

（順天堂大学医学部医史学研究室）